

平成 25 年 1 月 19 日

鴨川義塾での講話資料

大久保啓次郎

松沢弘陽校注『福澤諭吉集』の書評



1. 『福澤諭吉集』校注者の紹介

松沢弘陽（まつざわひろあき）

1930 年生。東京大学大学院法学部卒。丸山真男に学ぶ。前国際基督教大学教授。北海道大学名誉教授。日本政治思想史専攻。著書に『近代日本の形成と西洋経験』共編著に日本思想体系 66『西洋見聞集』等。

2. 本書の核心部分は、脚注、補注、解説、だ！¹

書名は上記の通りだが、収録作品は『福翁自伝』一編だけである。

本書は、本文を上段に置き、脚注を下段に置いて、それが 380 頁である。さらに補注 90 頁が続いて、19 頁の年譜の後に、19 頁の解説が配されるという構成になっている。

本書の際立った特徴は、脚注であり、補注であり、解説、である。

校注者が「福澤の語りを一つ一つ検証することは、『福翁自伝』を同時代の証言としても受け止め、『福翁自伝』を通して同時代を理解し、『福翁自伝』の豊かさを引き出すために不可欠である。そうした点について、本書では脚注と補注を通して時には煩瑣なまで考証を行った。」²と言う通り、全編にわたり徹底した校訂注解がなされている。

「煩瑣なまでの考証」にも拘らず読者は読んでいて世間でよくある鬱陶しさを感じない。むしろ、脚注も補注も極小の字体になのに、推理小説でも読んでいるかのように、興味津々で頁をめくっていくようになる。夜を徹して読みたくなる本である。

「煩瑣なまでの考証」の結果、福澤の語りには、大小の誤りが多いことが明らかにされるが、なぜそれが生じたのかの説明も行き届いていて、読者に反論の余地を与えない。

3. 校注者は福澤の語りにメスを入れ『福澤諭吉の真実』を明らかにした！

福澤の語りには、大小の誤りがあるだけでなく、全く語らなかった事実、少ししか語らなかった事実等々がある。校注者は、福澤が語らなかった部分の真実だけを明らかにするが、福澤がなぜ語らなかったのかについては、理由を全く追求しようとしなない。

例えば、『自伝』の目次では、「ヨーロッパ各国に行く」の次が「攘夷論」で、その次が「再度米国行」となっており、明らかに幕臣時代（1864 年～1866 年）の福澤の経歴

の部分に欠落している。福澤は、この時期の言動については、全く語っていない。

この点に関して校注者は、その時代の福澤の言動を明らかにして真実を語っているが、福澤が何故真実を語らなかったかについては、次のように述べるに留めている。

{「藩の政庁に対しては誠に淡白で、只の一度も建白なんということをすることが無い」という一句で、福澤が中津藩に建白（御時勢の儀に付申上候書付）を行った事実を否定するのも、外国奉行翻訳方の吏僚でありながら、幕府の第二次長州征討に際して、建白書（長州再征に関する建白書）を提出した事に口を噤むのも、「少しも政治に関係しない」（201 頁）という主題を強調するための操作であろう。」} ³

福澤は「明治 14 年の政変」についても、語ってはいるが、肝心な事は語っていない。

『自伝』が語らない事柄として、①後藤象二郎から岩崎弥太郎への高島炭鉱売却交渉への介入と斡旋、②交詢社の「私擬憲法案」作成とそれをもとにした大隈重信政体案の上奏、③開拓使官有物払下事件 が挙げられる。さらに福澤自身の問題ではないが、④政府側の福澤についての情報収集と福澤に対抗するための情報操作がある。 ⁴

上記②のような事柄の事実があったためか、『自伝』は、福澤のいわゆる三大事業のうち、慶應義塾と『時事新報』経営の苦心について語りながら、交詢社については全くふれず扱いを異にする。 ⁵

上記④については、福澤は政府側の情報を正しく把握していなかったために、語れなかったのではないか。それは以下の校注者の説明で良く分かる。

「政府内で福澤や交詢社の言説と運動の意味を最も鋭く、おそらく福澤門下に劣らぬほど良く理解した上で、福澤たちの構想を長期にわたって阻むのに貢献したのは、太政官・大書記官・内務大書記官として黒幕的に力を尽くした井上毅であった。それに対して福澤の方は最後まで井上の存在を知らなかったようである。『全集』にも『書簡集』にも井上の名前は出ない。その意味で 14 年政変における福澤の言動や行動とその意味を理解するためには、14 年政変における井上毅の研究が不可欠である。」 ⁶

又『自伝』で『時事新報』について語る部分（本書の 365 頁～370 頁）については、福澤の語りとは別に、近年、井田進也や平山洋などにより、時事新報の福澤社説とされたものの中に石河幹明や他の人が執筆した社説がある、という問題が提起されている。

校注者はこの問題を取り上げて、これまでの経緯を述べた後、自分の見解を次のように述べている。

『時事新報』社説の場合には、直接の執筆者を特定することは、社説の内容の発案者としての責任の所在を明らかにすることとは直結しない。直接的な執筆者が誰であるかにかかわらず、社説の内容は基本的に福澤にもとづき、責任は最終的には福澤に帰する場合が多いのではないか。 ⁷

次に福澤の語りの中に大小の誤りがある事例を 2 件提起する。

まずは奥平壱岐に関する記述である。

福澤は『自伝』で、福澤の長崎就業を断念させる「計略」は、壱岐自信が考案したも

のだと思っていた。⁸ 石川幹明や富田正文も、奥平壱岐の評価は、『自伝』における福澤に従い、言葉を極めて壱岐の人格を批判する。

しかし、河北展生論文（1992 年度）は、富田の『自伝』解釈から一步踏み出して、奥平壱岐は、終始福澤に好意的であった事、福澤の長崎修業を断念させる「計略」は、壱岐自信が考案したものではなく、壱岐もそれに乗せられたのであろう事を示した。⁹

次は井伊直弼に関する記述である。

福澤は、『自伝』の「幕府の攘夷主義」（本文 213 頁）で、「井伊直弼が開国主義者であったと世間で吹聴する人もあるが、開国主義なんて大嘘の皮、・・・真つ暗な攘夷家と言うより外に評論は無い」¹⁰と言っている。

しかし、島田三郎は、彼の著書『開国始末』で、井伊直弼の再評価を主題として、「井伊直弼が、初めより開港の主義を執りしことは、疑うべきに非ざるなり」と、断じている。¹¹

4. 「語らなかった事」と「語りに誤りがあった事」に対する校注者の対応

既述のように、校注者は、福澤が「語らなかった事」及び「語りに誤りがあった事」に関しては、すべて脚注と補注で、真実を明らかにした。

「語りに誤りがあった件」に関しては、それを訂正し正しい事実置き換えれば、1 件落着であるが、「語らなかった件」に関しては、語るべき真実を校注するだけでは、1 件落着とはいかない。「福澤はなぜ語らなかったのか？」と、語らない理由（原因）を校注する必要がある。しかし、校注者は理由（原因）の校注を全く行っていない。

「語らなかった事」の中には、語るべき事実を校注するだけで、福澤が語らなかった理由を推定できる件名もある。例えば、「明治 14 年の政変」である。既述のように、例の語られなかった 3 件については、当時の政府との交渉事に関する事項であり、読者は当時の状況判断から、事実の校注だけで語れなかった理由（原因）を推定出来る。

語らなかった最大事項は、幕臣時代（1864 年～1866 年）2 年間の福澤の言動である。語らなかったのは、本書の 505 頁の解説のように、{「少しも関係しない」という福澤の主題を強調するための操作であろう。} では、原因追及にならない。

平山 洋は、福澤が語らなかった理由を次のように分析している。「自伝のこの時期が空白地となっているのは、それが後の明治政府の関係者への敵対行動だったからであろう。維新後にそうした活動が露見すれば、報復は免れなかった筈で、それだけでなくも諭吉は、明治 6・7 年頃まで夜分の外出を控えたり、旅行でも変名を使っていたりしていたのであった。」¹²

しかし、『自伝』が発刊されたのは、明治 32 年である。明治維新の頃なら理解出来るが、あれから 35 年も経過していても、問題になるのだろうか。

ちなみに、校注者が巻末に参考文献として掲げている、石川幹明『福澤諭吉伝』と

富田正文『考証福澤諭吉』では、前者は幕臣時代の事については、福澤と同様に語っていないが、後者は、「幕末における政局観」の中の「幕府に対する態度の変遷」という項目で、幕臣時代の福澤の言動を取り上げている。¹³

次に福沢が『自伝』で語ったことに明らかに誤りがあるのに、本書では校注者が誤りを認めていないケースがある。本書の361頁で、甲申事変への福澤の関与の問題が問われている。明治20年頃、井上角五郎が捕えられて、福澤も裁判所に呼び出され尋問を受けた事件である。福澤はこの事件への関与を否定している。

校注者も福澤と同様に、福澤の甲申事変への関与を否定している。¹⁴

又、富田正文も、『考証福澤諭吉』で福澤の甲申事変への関与を否定している。¹⁵

ところが、石川幹明は、『福澤諭吉伝』で福澤の甲申事変への関与を認めているのである。¹⁶ 石川と同様に、平山 洋も、『福澤諭吉』で福澤の甲申事変への関与を認めている。¹⁷

石川幹明は、「井上が言うところによると、先生と金玉均と井上と三人の間における電信の暗号を持っており、又事変の発する前に、飯田三次をして横浜の商人の名を以って数十口の日本刀を井上の手元に送らしめた等の事実は、先生が如何にこの事件に関係の深かったかを証するに足るものである。」（『福澤諭吉伝』341頁）と言っている。

遠山茂樹『福澤諭吉』¹⁸や杵淵信雄『福澤諭吉と朝鮮』¹⁹も、甲申政変での福澤の関与を認めているが、その根拠は、両者とも石川幹明の『福澤諭吉伝』に基づいている。

校注者は、『福澤諭吉伝』を主たる参考文献としているが、石川幹明のこの見解を、どのように捉えているのであろうか。

5. 『福翁自伝』での「福澤の語り」の特徴→（校注者の「解説」より抜粋）²⁰

1. 福澤自身においてもそれまで試みたことが無い、生き生きした語りの文体が執られた背景には、自己の生の終わりを見据えて死後もなお「独立の手本を示」し続けることを願って『福翁自伝』を公にした。
2. 自分のライフヒストリーの重要なことがらが初めて語る真実であることを繰り返して告白した。
3. しかし、「脚注と補注を通して時には煩瑣なまでの考証を行った」結果、明らかになったのは、同時代についての福澤の語りには大小の誤りが多い事である。
その原因は、福澤が資料によって裏付けするのはむしろ例外的で、多くは記憶によって『福翁自伝』を語ったからではないか。
4. 『自伝』の基本的な主題はなんであるか、種明かしの言明は無い。それは閉ざされた小社会の中の孤立した自我が「独立」に向って自己形成する物語である。
閉鎖的な藩地で疎外された孤立から出発し、自己を抑止する政治体制と社会に働きかけ、あるいは巧妙にしたたかに戦い、たびたび自我の危機をくぐり、そして

「独立」の内実を豊かにし、又深めてゆく。「一身」のそれから出発した独立は、「先ず一身の私を慎しみ、一家の生活法を謀り、他人の世話にならぬように心掛け」、「鎖国の日本を開いて西洋流の文明に導き、富国強兵を以って世界中に後れを取らぬようにしたい」と拡大する。「一身独立して一家独立し、一家独立して一国独立し、一国独立して天下も独立すべし。」

5. 全てを洗いざらい告白するような印象を与えるがそうではない。何を「自首」し、何について「正味を言」うかは、はっきり選択されるのである。
6. 「一切万事、人にも物にもぶら下がらずに世の中を渡ると、チャンと説を定めている」という独立の基本主題になじまないと考えたのであろうか、このような改革気運の中で福澤に力を籍した人々は、『福翁自伝』の語りから省かれる。たとえば、小幡篤次郎、緒方洪庵夫妻、木村芥舟らは、それである。

「少しも政治上に関係しない」という主題を強調するために、幕臣時代に幕府や中津藩に対して提出した「建白書」については、口を噤んだ。

7. 他方、福沢が独立のために戦った敵を強調するためであろうか、様々な旧制度の具象化とも言うべき悪役が要所所で語られる。奥平菴岐、小野友五郎らがそれである。榎本武揚もその一人である。

しかし、近年の研究は、奥平菴岐が『福翁自伝』が語るように無能でも、福澤への悪意をもって画策したのでもなく、むしろその反対であることを明らかにしている。小野友五郎も、幕府海軍の航海術のベテラン、軍政家、財務官僚として優れ、多くの旧幕海軍士官が新政府海軍に加わる中で節操を貫いて海軍への出仕を拒み、民間で産業振興に力を尽くす傍ら、政府の鉄道建設を助けて生涯を終えた。

『福翁自伝』は小野友五郎の否定的な面だけを拡大していると言えよう。加藤弘之についても否定的な面だけを強調しており、同様の事が言えるだろう。

8. 『福翁自伝』の構成性は、全体の構造について言えば、狭く限っても「一身一家経済の由来」の章からの三章が、先行の章と語りのスタイルがはっきり使い分けられているところに良く現れている。これを後半、前半とするなら、前半にも構成性は貫いていたが、語りは基本的に時の継起に従っていた。これに対して後半では、明治初年から『福翁自伝』執筆当時までを中心として、出来事の思い切った選択によって主題別に構成する。
9. 福澤は『福翁自伝』の物語によって、一身の生を越えて「独立の手本を示」し続けようとしたのではないか。そのために自己の生の公私にわたってかつて語った事が無い性行の欠点や公的活動の秘話までを語り、著作として公刊したのではないか。

6. 本書を読み終えて「目からうろこが落ちました！」

私は、今年で71年間生きております。本を買って読む場合、理解出来ない時に、脚注に目を通すことは時々ありました。今回、著者でもなく、翻訳者でもなく、校注者という名目の本に初めてお目にかかりました。松沢弘陽校注『福澤諭吉集』がその本です。脚注あり、補注あり、解説ありで、最初は違和感を覚えました。

ところが、『福翁自伝』を今まで福澤研究のために数回読んでいますが、今回購入した松沢弘陽校注の『福翁自伝』を、隅から隅まで読んで大変感銘を受けました。脚注、補注、解説が、一つのストーリーだということに気がついたのです。

9月中旬から10月下旬、約1ヵ月半の間に、本文も含めて脚注、補注、解説を10数回読み(特に補注には1～160まで一通り目を通し)、大きな感動を覚えました。

今までは、「アジの開き」の身だけ食べても、骨と皮は捨てていましたが、今回は美味しく、身だけでなく、骨と皮を中心に残さず全て食べた感じが致しました。

改めて松沢弘陽先生の素晴らしい校注に感謝したいと思います。

滅多に経験しませんが、今回は読み終わって「目からうろこが落ちました。」

さて、この本の読後感はこのくらいにして、今回話題になっている事に関して、一言質問したい事があります。

それは、「福澤が語らなかった事項」に関する事柄です。幾つかある中で、何と言っても福澤の幕臣時代(1864年～1866年)2年間の空白事項です。

なぜ福澤先生はこの時代のことを自伝に残さなかったのでしょうか？

平山洋先生が言うように、薩長中心の明治政府に知られたくなかったからでしょうか？ それはともかくとして、私は福澤先生が、あの時代のことを自伝で堂々と語っても、誰からも批判されずに、後世に残すことが出来たと思います。

なぜなら、福澤先生の幕府に対する態度は、その後2年間で180度変わりますが、福澤先生の「日本の文明化」→「独立自尊」の考えは終始一貫しているからです。あの2年間、福澤が幕府に加担したのは、日本を開国させて、西洋の文明を取り入れ、日本の「文明開化」を推進しようと思ったからです。あの時は薩長中心の大名同盟は「攘夷主義」が中心で、幕府は表面的だが「開国主義」だったので、福澤が、「大名同盟」よりも「大君のモナルキ」を選択するのは、当然だったと思います。福澤先生は、日本を「文明開化」するには、「大名同盟」よりも「大君のモナルキ」の方がベターであると、ロンドンに留学している福澤英之助に書簡を認めています。したがって、この事を『自伝』で語って問題となるようなことがあるのでしょうか？ その事を語っても、明治政府との過去の問題が再燃することはなかったでしょう。しかし、思慮深い福澤先生には、もっと別な考えがあったのかもしれない。

したがって、これ以上ヤボな詮索をする事を慎みたいと思います。

最後に、多くの人達がこの素晴らしい書籍を読まれることを希望致します。

-
- ¹ 竹田行之「松沢弘之校注『福澤諭吉集』を読む」、『福澤手帳』150 福澤諭吉協会、4 頁。
 - ² 松沢弘陽校注『福澤諭吉集』岩波書店、2011 年、499 頁（解説）。
 - ³ 前掲書、505 頁（解説）。
 - ⁴ 前掲書、459 頁（補注 143）。
 - ⁵ 前掲書、460 頁（補注 143）。
 - ⁶ 前掲書、461 頁（補注 143）。
 - ⁷ 前掲書、470 頁～471 頁（補注 156）。
 - ⁸ 前掲書、32 頁～34 頁（本文：「長崎に居る事難し」）。
 - ⁹ 前掲書、391 頁～392 頁補注 15 奥平壱岐）。
 - ¹⁰ 前掲書、214 頁（本文）。
 - ¹¹ 前掲書、421 頁～422 頁（補注 76 井伊掃部頭）。
 - ¹² 平山 洋著『福澤諭吉』ミネルバ書房、2008 年、209 頁～210 頁。
 - ¹³ 富田正文『考証福澤諭吉』岩波書店、1992 年、上巻 236 頁～240 頁。
 - ¹⁴ 松沢弘陽校注、前掲書、466 頁～467 頁（補注 152）。
 - ¹⁵ 富田正文、前掲書、下巻 671 頁～673 頁。
 - ¹⁶ 石川幹明『福澤諭吉伝』岩波書店、1932 年、第 3 巻 340 頁～341 頁。
 - ¹⁷ 平山 洋、前掲書、342 頁。
 - ¹⁸ 遠山茂樹『福澤諭吉』東京大学出版会、1998 年、181 頁～197 頁。
 - ¹⁹ 杵淵信雄『福澤諭吉と朝鮮』彩流社、1997 年、121 頁～133 頁。
 - ²⁰ 松沢弘陽校注、前掲書、495 頁～513 頁（解説）。